新約聖書 ルカによる福音書 2 章 41 節―52 節（新共同訳）

41 さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。42 イエスが十二歳に
なったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。43 祭りの期間が終わっ
て帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそ
れに気づかなかった。44 イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道の
りを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、45 見つからな
かったので、捜しながらエルサレムに引き返した。46 三日の後、イエスが神殿
の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを
見つけた。47 聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。48 両親
はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれたのです。御
覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」49 すると、イエ
スは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家に
いるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」50 しかし、両親
にはイエスの言葉の意味が分からなかった。51 それから、イエスは一緒に下っ
て行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことを
すべて心に納めていた。52 イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛さ
れた。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「神と人とに愛され」

「知恵」について、ボンヘッファーという牧師はこう述べています。「〈知恵〉とは、〈知識〉や〈理解〉とは違ったものである。知恵とは、神の意志を人生の〈具体的な〉課題の中で認識することにほかならない」。

ここでの知恵とは、いわゆる、「勉強ができる」「能力がある」といったことを指すのではなく、「神の意志」を認識することであり、知恵のある人とは、その「神の意志」を人生の具体的な課題の中で認識できる人だということでしょう。

「人生の具体的な課題」とは、人によって様々で、人生において全く同じ課題を持つ人はいないと思います。またその課題とは、どちらかというと「困難」「苦難」を伴う、試練と言えるものが多いかもしれません。

そんな中においても、神の意志をそこに見ることができる人が、真実に知恵のある人だと言えるのでしょう。

本日の福音書には、幼子だったイエスが成長して、知恵が備わり、神の恵みを豊かに受けていく様子が記されています。そこでは、神の恵みによって、すべてのことが導かれていたのです。

イエスは、律法に忠実である一般的なユダヤ人家庭に育ち、毎年両親に連れられて、片道 100 km 以上離れたエルサレム神殿に行き、過越祭のお参りをしていました。

そして、イエスが 12 歳になった時も、イエスの両親は祭りの慣習に従って、エルサレムの都に上り、神殿に赴きました。

当時、ユダヤの男子は、13 歳になると宗教上の成人とされ、「律法の子（バル・ミツバ)」という儀式を行いました。それによって「子供」であることから脱し、ヤハウェの全律法を知り、その戒めを実行し、成人として宗教的義務に関わることを求められたのです。

そして、その準備として、その年に 13 歳になる男子たちが地域の会堂ごとに集められ、過越祭の巡礼に併せて都へ上る慣習がありました。

宗教上の成人となる 13 歳を控えた、12 歳のイエスが、祭りの慣習どおり都に上ったときに、その出来事は起こりました。祭りが終わって両親が家路についたのに、イエスはエルサレムに残っていて、両親はそれに気がついていなかったのです。

途中、我が子イエスがおらず、同行の人々とも一緒でないことに気がついた両親は、我が子を捜しながらエルサレムに引き返しました。そして三日の後に、エルサレムの神殿で、律法の教師たちと共にいて、問答を交わしているイエスを見つけました。その場にいた人たちは皆、イエスの賢さや受け答えに驚いていました。神の恵みの下（もと）にあるイエスには、霊的知恵があったのです。

イエスのその姿を見て、両親は驚きます。母マリアはイエスにこう言います。「なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」（ルカ 2:48)。

マリアのイエスへの呼びかけは、原文ではこうなっています。「彼の母は彼に言った、『子よ』」。マリアにとって、イエスは「わたしの子」なのです。そして、「お父さん」も「あなたのお父さん」と原文では書かれています。

すなわち、母マリアはイエスにこう言いました。「子よ。わたしたちに対して、なぜこんなことをしてくれたのです。御覧なさい。あなたのお父さんもわたしも心を痛めて捜していたのです、あなたを」。

我が子を心配する親心を感じさせられる言葉です。

この神殿での出来事から 10 年以上前、イエスを身ごもったときに、「神にできないことは何一つない」と天使に言われ、「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」と言ったマリアでしたが、一般的な親子

関係と同じように、イエスを我が子として育ててきたことが伝わってきます（ルカ 1:37-38）。

そんなマリアに、本日の福音書でイエスはこう答えます。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」（ルカ 1:49）。

少年イエスは、神を自分の父と呼び、自分が神との親密な交わりのうちにあることを認識していました。イエスは、自分が何者なのかを知っていたのです。しかし、両親にはその深い言葉の意味を悟ることができませんでした。

（50 節の）イエスの「言葉」は、原文では「レーマ」というギリシャ語の単語が使われています。レーマはしばしば「こと」や「出来事」と訳されます。

ヘブライ語でも「語る」と「出来事」は基本的に同じ単語です（ダーバール）。神が「光あれ」と言われると、光があるのです。語られた言葉は、現実において「出来事」となるのです。

さて、神殿での出来事のあとイエスは両親と一緒にナザレに帰って、子としての従順さをもって両親と暮らしました。イエスが、両親の思いを超えた神の子でありながら、それでも子として両親に従って生活します。

我が子イエスが行方不明になったとき、母として混乱をしたマリアではありましたが、マリアはこのことを神の御業のひとつとして、深く心に留めました。

そしてルカ福音書は、少年期のイエスについて「イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人とに愛された」という言葉で締めくくります（ルカ 2:52）。

「神と人とに愛された」とは、何とも心が満たされる良い言葉だと思います。これは、すべての人間にとっても、そうでありたいことではないでしょうか。

神からだけでもなく、人からだけでもない、「神と人とに愛される」ということは、人間として生きていて良かったと心から感じられることだと思います。

フランスの詩人であり小説家であるヴィクトル・ユーゴーは、こう述べています。

「人生最大の幸福は、愛されているという確信である。自分のために愛されている、否、もっと正確には、こんな自分なのに愛されているという確信である」。

そして、相手から自分が直接的に愛されているとは感じなくても、その相手との出会いによって神の愛を感じさせられる出会い、というものが私たちの人生にはあるのでしょう。

私たちは、神の愛、神の祝福によって、この人生を生かされているのです。

今年最後の礼拝となりました。

2025 年も、私たちは、喜びと希望のうちに、共に歩んで行きましょう。

お祈りをいたします。
神様。私たちはあなたの恵みによって育ち、生かされています。いま、この時代を生きる子どもたちが、私たちの思いを超え、あなたと人からの愛によって育っていくことができますように。この 1 年に与えられた恵みに感謝しつつ、来るべき年も、あなたに従わせてください。御子 主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第 1 朗読と第 2 朗読）です。

旧約聖書 サムエル記上 2 章 18 節―20 節と 26 節（新共同訳）

18 サムエルは、亜麻布のエフォドを着て、下働きとして主の御前に仕えていた。19 母は彼のために小さな上着を縫い、毎年、夫と一緒に年ごとのいけにえをささげに上って来るとき、それを届けた。20 エリはエルカナとその妻を祝福し、「主に願って得たこの子の代わりに、主があなたにこの妻による子供を授けてくださいますように」と言った。こうして彼らは家に帰った。
26 一方、少年サムエルはすくすくと育ち、主にも人々にも喜ばれる者となった。

新約聖書 コロサイの信徒への手紙 3 章 12 節―17 節（新共同訳）

12 あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。13 互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしなさい。14 これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。15 また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。16 キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。17 そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

教会讃美歌 131 番「聖なる聖なる」1,2,4 節、308 番「冠ささげ」1,2,5 節、375 番「神の息よ」1,2,4 節、394 番「主よ終わりまで」1,2,4 節